

中国の古都・南京市郊外の江東門に「中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館」がオープンした。その日八月十五日、現地では「抗日戦争勝利四十周年」の日だった。わが国ではさまざまな論議を呼んでいる「南京大虐殺」を史実として後世に残そうというも

オープンした南京大虐殺記念館

の。外国人シャットアウトの中、特別に開館除幕式に招待された日本人三人が初めて内部をのぞいたが、入り口に犠牲者数を「三十万人」と記し、百枚を超える記録写真を展示、犠牲者像を彫ったレリーフが二百枚にも及び、大量の遺骨を納めた安置所もあった。
(大阪社会部・大野 俊)

を表す玉石、戦災を表す赤土、平和を表す芝生の三つの区画に分かれ、玉石の所にかこう岩でできた一階建ての本館がある。岩に刻まれた「：記念館」という文字は、中国の最高実力者、鄧小平・党中央顧問委主任の筆によるものだ。

人骨ぎっしり、ガラスケースに

建設費は中国政府が三百万(元約二億五千万円)を負担、中国全土から集まった募金も充てられた。館内には百点以上のモノクロ写真を展示。首切り、婦女暴行など日本兵による暴虐行為、河岸に延々と並ぶ市民の死体、南京事件の戦犯として処刑された谷寿夫中将の死体などの説明文がつき、目をそむけたくなるものが多い。遺骨安置所は別棟になって

累々と重なる虐殺犠牲者を表現したレリーフ

市川元総評議長らに招待状

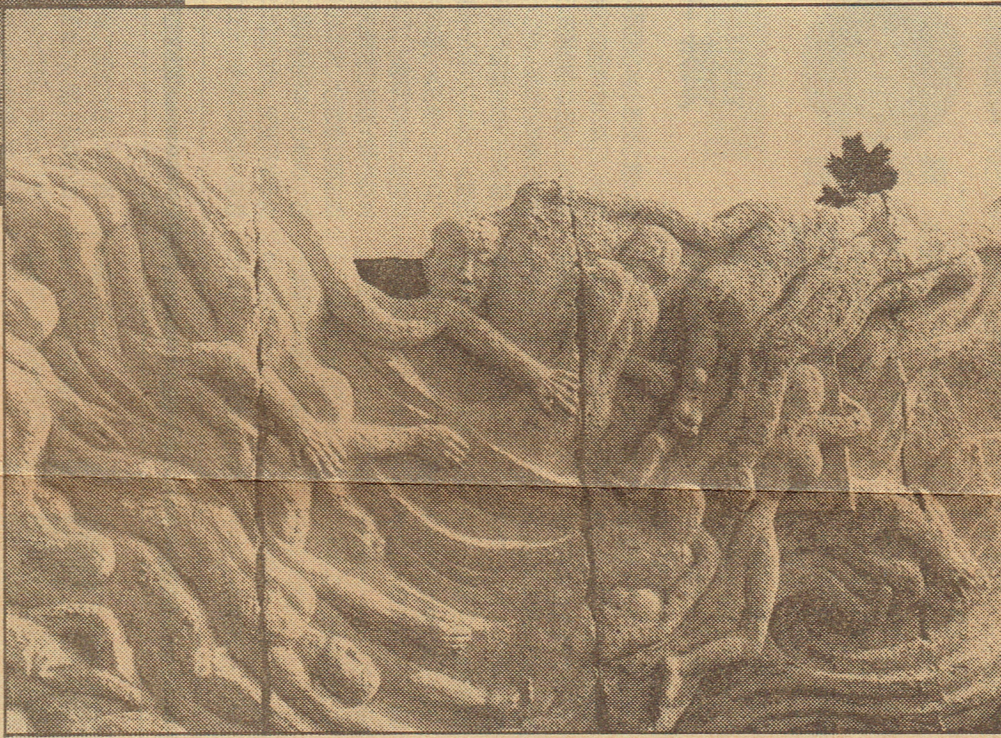
三人は、元総評議長で日中労働者交流協会長の市川誠さん(左)、全港湾閩西地本書記長、平坂春雄さん(中)、日教組札幌支部西区支会長、山田順三さん(右)で、今春訪中した「労働情報、全国労組連帯第一次訪中団」のメンバー。当時は、江東門で、記念館建設に先立って犠牲者の大量の遺骨が発掘されている現場を見

「三十万」と犠牲者が記された記念館入り口

て、胸がしめつけられる思いに陥った。中華全国总工会(全国組織の労組)を通じて強く開館式への参加を申し込み、南京市からの招待状を手にした。

市川、平坂さんの見聞によると――。

案内役は、楊正元館長ら担当。記念館は敷地が一万八千平方メートル。庭園は、人間の魂



戦争の悲惨さ 後世に

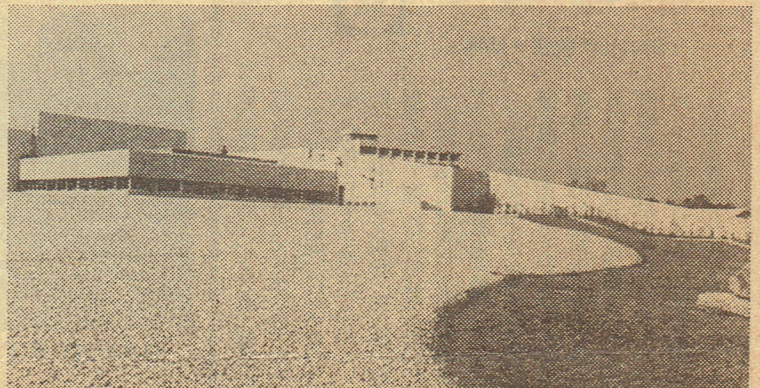
いる。納められているのは、ほとんどが記念館建設のとき畑地から掘り出されたもので、頭、手足などの人骨が幅

犠牲者像レリーフ、200 層にも

この安置所を取り囲む壁には、高さ二層、延長約二百メートルのレリーフがあり、折り重なった男女の死体、ちぎれた五体、ひもで縛られた裸の男性、悲痛な顔の男児などが彫られていた。

館内に置く鎮魂の置き時計を寄贈した市川さんらに対し、張耀華・南京市長が言った「若い世代に戦争の悲惨さを伝えるのが記念館の目的。今後、二度とこのようなことが起きないように、日中友好を進めよう」との言葉が耳に残ったという。

(写真はいずれも平坂春雄さん撮影)



南京大虐殺記念館の全景